

会話データ分析の手法を学ぶための授業実践 -学部生の学びの分析からの考察-

An Analysis of What Was Learned by Undergraduate Students Attending a Course on the Methodology of Conversational Data Analysis

中井陽子
NAKAI Yoko

東京外国語大学大学院国際日本学研究院
Institute of Japan Studies, Tokyo University of Foreign Studies

はじめに

1. 会話データ分析活動の先行研究
2. 会話データ分析の教材開発
3. 授業概要
4. 受講者の学びの分析
 - 4.1. 初対面会話・雑談の分析活動
 - 4.2. ロールプレイ（誘い、依頼）の分析活動
 - 4.3. 留学の体験談の分析活動
 - 4.4. グループ分析活動の発表
5. 授業アンケートの分析
6. 総合的考察
 - 6.1 本授業と教材の効果
 - 6.2 本授業と教材の改善点

おわりに

キーワード：会話データ分析、教材開発、初対面会話、ロールプレイ、体験談

Keywords: Conversational data analysis, Development of teaching materials, First-time meeting conversations, Roleplay, Storytelling



【要旨】

本研究では、会話データ分析の手法を学ぶ学部の授業実践における受講者の学びについて分析した。分析の結果、受講者がグループで話し合いながら、実際の会話データを分析することで、多角的な観点から日本語の会話の特徴や、その基本的な分析手法が学べていたことが分かった。また、大学生活で遭遇しやすい会話場面を扱ったため、受講者が身近に感じながら分析に取り組めたようであった。さらに、会話データの特徴で分析した視点をもとに、自身の会話の仕方を内省し、今後の日常生活に活かして改善しようとする姿勢が見られた。一方、グループの話し合い時間の長さのほか、より多様な会話データの必要性、文字化の方法と理論の導入の必要性、日本語教育との関係の議論の必要性といった授業運営面と教材内容面の改善点が明らかになった。

In this study, the author analyzes what kind of insights students acquired from a class on conversational data analysis. It was found that the students grasped various features of Japanese-language conversations as well as the basic methods of analysis through the experience of analyzing actual conversational data. Additionally, the students were able to acquire various insights through group discussions carried out in the class. The students were also able to feel a sense of connection to the analysis of the conversations, because the conversational data included conversations often encountered on campus life such as first-time meetings, invitations, and presentations. Moreover, the students reflected on the conversations they themselves engage in, and tried to find a way to improve those conversations, referring to the analyses they had just done. On the other hand, it appears necessary to re-examine and improve certain aspects of classroom management and the material contents (e.g., more time was needed for discussion, the conversational data was not sufficiently diverse, methods of transcriptions, introduction of theories, and discussions on the relationship of conversational data analysis with Japanese language teaching).

はじめに

会話データ分析とは、談話分析 (DA: Discourse Analysis)、会話分析 (CA: Conversation Analysis) など、話し言葉のデータを扱った様々な分析の総称であり (中井 2012)、録音・録画・文字化した会話データによって、実際の言語・非言語行動を詳細に記述・分析するものである。それ故、会話データ分析は、会話を客観的に分析する視点を養い、自身の会話を内省・改善していける。その利点を活かして、会話データ分析は、日本語クラスや日本語教員養成に

も活かされており、授業実践の報告や会話教材の開発が行われている（中井 2008、2009、2012、岩田他 2012、大場 2013、中井他 2015 など）。だが、会話データのビデオの分析から基本的な手法を学び、自身の会話を内省するための初学者用教材が体系的な形で未だ共有されていない。

そこで、本研究では、初学者が会話データ分析の手法を学ぶための教材を開発し、その教材を用いた授業実践において、受講者が会話データ分析のどのようなことを学んだかについて分析した。さらに、会話データ分析を行う授業実践での教材の効果および改善点を検討する。これにより、初学者のための会話データ分析の手法を学ぶ教材の共有を目指し、今後の教材開発と授業実践について考える。

1. 会話データ分析活動の先行研究

会話データ分析を日本語クラスや日本語教員養成で行った授業実践には、中井（2008、2009、2012、大場 2013、中井他 2015 など）などがある。

中井（2008、2012）では、日本語学習者を対象とした日本語授業において、会話データ分析の手法を用いて、学習者が自身や他者が参加する初対面会話などの会話データを実際に分析する練習を行い、その後、学習者自身が収集した会話データを分析した結果を発表し、レポートにまとめるという活動を分析している。こうした活動により、学習者が会話を客観的に見る視点を養い、今後の自身の日本語での会話を見直す契機となっていたと述べている（中井 2008、2012）。

また、中井（2009、2012）では、社会人対象の日本語教員養成コースにおいて、会話データ分析の基礎的知識を紹介し、実際の会話データを視聴しながら会話データ分析の視点を養うことを目的とした授業を分析している。主に、初対面会話、ロールプレイ、ストーリーテリングなどの会話データの分析練習を行い、その後、受講者自身が参加する会話データをグループで分析、発表するという活動を行っている。こうした活動により、受講者の会話を分析する視点が育成され、日常生活の会話の特徴を意識化するようになったとしている（中井 2009、2012）。さらに、大場（2013）では、学部生対象の日本語教員養成コースにおいて、受講者に会話データ分析を行う研究を紹介し、そこに掲載されている会話データの文字化資料を分析させることで、日本語母語話者と非母語話者による接触場面で起こりうる問題を意識化させることを目的とした授業を分析している。この結果、受講者が実感を持って接触場面の問題を捉えている様子が見られたとしている（大場 2013）。

さらに、会話データ分析の手法を日本語の会話教材に取り入れて開発したものには、岩田他（2012）がある。この教材は、初級終了時の日本語学習者が「日本語の日常会話の展開の特徴を意識しながら、主体的にやり取りに関わっていけるようになるヒントを提示すること」（岩田

他 2012:9) を目的としている。教材では、まず、学習者の母語での会話のやり取りがどのようになっているか意識化しながら、日本語の会話例を聞き、会話が円滑に進んでいない理由を考えさせる。そして、会話をする際に重要となる点（例：話題、確認、説明、体験談の構造、つなぐ表現、質問、意見述べ、あいづち、感想、柔らかい表現、聞き返し、間、謝りなど）を確認し、話す練習をするという構成になっている。特に、学習者が聞き手としてどのように振る舞い、自分の発話を調整しながら話し手と相互行為を行えるかといった会話分析 (CA) の観点に基づいて教材が設計されている。こうした点は、会話というものを学習者に考えさせる教材として示唆に富む。

以上から、会話データ分析の手法を取り入れた授業実践は、日本語学習者や日本語教員養成コース受講者の会話を分析する視点を養い、日々の会話の特徴や問題点に気付かせ、自身の会話を調整して改善していく姿勢を培う可能性を有していると言える。そこで、本研究では、こうした会話データ分析の手法を取り入れた学部生対象の授業、および、授業のために開発した教材からの受講者の学びについて分析し、授業と教材の効果を検証する。

2. 会話データ分析の教材開発

筆者は、以下の(1)-(3)の理念・目的のもと、会話データ分析の知識がほとんどない初学者（日本人学生、日本語学習者、日本語教師を目指す者など）が会話データの収集・分析方法などの基本的な手法が学べる教材を開発した。

表 1 会話データの手法を学ぶ教材開発の理念・目的

- | |
|---|
| <p>(1)実際の会話データ（ビデオ、文字化資料）を分析する体験を通して、基本的な分析手法を学ぶ。その際、受講者がグループで分析について話し合い、多角的な視点に触れつつ、新たな課題を発見していけるようにする。</p> <p>(2)会話データは、初対面会話（母語場面、接触場面）、誘いの会話、依頼の会話、留学の体験談の会話、インタビューの会話など、大学生活で身近なものを扱う。</p> <p>(3)受講者が分析した点を参考に、自身の会話を内省し、改善点を探れるようにする。</p> |
|---|

本教材を作成するにあたって、初対面会話（接触場面）は、筆者が以前に収集して分析した会話データを用いた（中井 2002、2003a、2003b、2004、2010、Nakai 2002）。さらに、新しく会話データに参加してもらえらる演劇部などの学部生・大学院生を募り、教材化する旨に承諾を得てから、指定の会話（誘い・依頼のロールプレイ、留学の体験談の会話、インタビュー会話）にそれぞれ参加してもらい、ビデオ撮影を行った。その後、中井（2002）をもとに、会話時の意識について会話ビデオを視聴しながら確認するフォローアップ・インタビューを個別に行っ

た。会話データとフォローアップ・インタビューは、全て文字化し、必要箇所を教材化できるようにした。

上記の会話データのうち、筆者は、初対面会話（接触場面）、誘い（言いさし発話、展開構造）、留学の体験談について分析を行い（表2）、受講者の分析の手がかりとなるように、その成果をワークシート教材の形で盛り込んだ。そして、各ワークシートには、会話データの分析とその結果に基づいて自身の会話を振り返る課題として、「会話データの面白い点・気付いた点」、「分析の感想」、「さらに分析したい点」、「今後のコミュニケーションで気を付けたい点」を記入する欄を設けた。また、受講者が自身の参加する会話を分析する際に用いる「会話感想シート」は、中井（2010、2012）を参考に作成した。さらに、受講者自身が収集した会話データに対するフォローアップ・インタビューを行う際の質問事項の例は、中井（2002）を参考にワークシートに盛り込んだり。

表2 教材に盛り込んだ会話データ分析の研究

中井（2002、2003a、2003b、2004、2010）、Nakai（2002）	初対面会話（接触場面）における話題開始部と終了部で用いられる言語的要素の分析
ウィモンサラウオン・中井（2017）	誘いの会話における言いさし発話の分析
中井（2017a）	誘いの会話の展開構造における駆け引きの分析
中井（2017b）	留学の体験談の会話の特徴、必要とされる能力・技能・配慮の分析
中井（2010、2012）	会話感想シート
中井（2002）	フォローアップ・インタビューの手法の説明

3. 授業概要

2017年度後期（全13回）に、会話データ分析の手法を学ぶ学部授業において第2章で述べた教材（会話データのビデオ、文字化資料、ワークシート）を用いて、会話データ分析の活動を行った。受講者は、全38名（学部3、4年生31名、研究生7名）のうち、日本人学生29名、外国人留学生9名（中国7名、インドネシア2名）であった。受講者の専門は、日本語教育、日本語学のほか、その他の外国語を対象とした言語学や言語教育学などであった。受講者の中には日本語教師や英語教師を目指す者もいれば、それ以外の職業を希望する者もいた。

授業の目標は、ビデオ撮影した実際の会話データをもとに、会話データ分析の基本的な手法を学び、日本語の会話の特徴を客観的に分析することで、自身の話し方を振り返り、よりよいコミュニケーションとは何かを考えることであった。授業スケジュールは、表3の通りである。各活動で参考にした会話データ分析の研究は、「教材に盛り込んだ研究」欄に記入した。また、

本授業の活動のうち、筆者が既に分析して論文にまとめたものは、「既に分析した活動」欄に記入した。

表 3 授業スケジュール

	会話データ分析活動	グループ分析活動	教材に盛り込んだ研究	既に分析した活動
1. 10/3	授業の説明 初対面会話(母語場面)の話題区分			大場・中井 (2018)
2. 10/10	初対面の会話 (接触場面)の分析	受講者の雑談の会話 ビデオ撮影+会話感想シート記入	中井(2002、2010、 2012) Nakai(2002)	
3. 10/17		受講者の雑談の分析 (話題の流れ、話題転換部特徴、FUI)	中井(2002)	
4. 10/24		受講者の雑談の分析 の発表		
5. 10/31 6. 11/7	ロールプレイの分析 (誘い)		ウィモンサラウ オン・中井(2017) 中井(2017a)	
7. 11/14 8. 11/28	ロールプレイの分析 (依頼)	会話データ収集計画 書の作成		
9. 12/5 10. 12/12	留学の体験談の分析	発表のアウトライン 作成 グループ分析作業	中井(2017b)	
11. 12/19	インタビュー会話の 分析	グループ分析作業 発表準備		中井 (2018a)
12. 1/9		グループ分析の発表		
13. 1/16		グループ分析の発表		

まず、会話ビデオを視聴しながら、その特徴を分析する練習を行い、日本語の会話の特徴を考える会話データの分析活動を行った。この活動では、初対面会話(第1回:母語場面、第2回:接触場面)、ロールプレイ(第5、6回:誘い・断り、第7、8回:依頼・承諾)、留学の体験談(第9、10回:体験談の会話、スピーチ、話し合い)、インタビュー会話(第11回)を会話データとして扱った。

次に、第2回目の授業において、受講者が3、4人のグループになり、自分達が参加する雑談の会話(初対面、知人)をビデオ撮影した。そして、会話終了後、各自、「会話感想シート」に感想を記入した。第3回目の授業では、前回記入した「会話感想シート」を参考にしつつ、

撮影した会話ビデオを視聴しながらフォローアップ・インタビューを行った。これをもとに、第3、4回目の授業で、グループ分析・発表をする活動を行った。

最後に、第8～13回目の授業で、受講者が3、4人のグループになり、これまで授業で学んだ会話データ分析の知見をもとに、独自に会話データを収集し、分析・発表を行った。

なお、上記に加えて、第2～8回目の授業において、会話データ分析の研究の変遷、および、研究成果の社会への還元のある方についてまとめられている中井他（2017）の文献を講読し、授業での話し合いをもとにレポートを作成するという課題も課した²⁾。

本授業の成績評価は、1. 討論・課題（40%）、2. グループ分析発表（30%）、3. 文献講読レポート（30%）とした。

4. 受講者の学びの分析

本授業の会話データ分析の活動において、受講者が会話データ分析についてどのようなことを学んだか、受講者のワークシートの記述から分析する。まず、初対面会話・雑談の分析活動（4.1）、ロールプレイ（誘い、依頼）の分析活動（4.2）、留学の体験談の分析活動（4.3）、グループ分析発表の活動（4.4）の各活動の手順・内容について説明する。そして、各活動における受講者の学びについて分析する³⁾。なお、雑談の分析活動については、受講者の「会話感想シート」の記述をデータとする。ロールプレイ、留学の体験談の分析活動については、各ワークシートに設けてある「会話データの面白い点・気付いた点」、「分析の感想」、「今後のコミュニケーションで気を付けたい点」の欄に受講者が記述したものをデータとし、各記述の内容が似ているものごとに分類し、タイトルを付した。グループ分析活動の発表は、受講者が作成した発表資料をデータとする。なお、本研究において分析する受講者のデータは、全て受講者の了承を得て分析・掲載している。

4.1. 初対面会話・雑談の分析活動

初対面会話・雑談の分析活動は、(1)初対面会話（母語場面）の話題区分、(2)初対面会話（接触場面）の分析、(3)受講者の雑談の会話ビデオ撮影・会話感想シート記入・分析・発表という流れで行った。

(1)初対面会話（母語場面）の話題区分

まず、初対面の日本人学部生2名による母語場面の会話ビデオ（約10分程度）を見ながら、配付された会話の文字化資料に話題区分と話題のタイトルを記入していく作業を個別に行った。この初対面会話では、所属学科、留学、出身地、家族などの自己紹介が主な話題であった。次に、3、4人のグループになって、話題区分について話し合い、話題の認定基準、および、話題

開始部・終了部の特徴についてワークシートに記入していった⁴⁾。これにより、会話における話題という単位を検討する契機とするとともに、グループで話題区分の認定基準を検討し、すり合わせていく体験をすることをねらった。

(2)初対面会話（接触場面）の分析活動

初対面の日本語母語話者と日本語学習者の2名による接触場面の会話ビデオの断片を4本視聴し、そこでの特徴を分析した。視聴した会話ビデオの断片は、中井(2002、2010)、Nakai(2002)で分析した会話データであった。1つ目は、母語話者が学習者の話の聞き手になり、あいづちや評価的発話によって徐々に話題を終了させ、接続表現、質問表現を用いて話題を開始させている断片であった。2つ目は、学習者が母語話者の話の聞き手となるが、あいづちや評価的発話がうまく使えず、沈黙してしまう断片である。3つ目は、学習者が母語話者の話の聞き手となり、あいづちや評価的発話、質問表現を用いて積極的に会話に参加しようとするが、母語話者の用いる語彙が分からず、話題を唐突に転換してしまう断片である。4つ目は、学習者が母語話者の話の聞き手となり、あいづちや質問表現などで積極的に会話をリードしようとするが、自身の感想を述べる評価的発話を用いて話題をまとめないため、母語話者に話題を理解していないと誤解されてしまう断片である。また、母語話者は、相手の学習者に配慮して、易しい語彙や英単語を用い、はっきりした発音で発話速度を調整しながら話すフォーリナートークを行っていた。このような会話ビデオを視聴して、受講者があいづち、評価的発話、質問表現、接続表現、相手への配慮といった点に着目して分析を行った。

(3)受講者の雑談の会話ビデオ撮影・会話感想シート記入・分析・発表

受講者が4人程度のグループになって、別室に移動し、5分程度の雑談を行い、その様子を1人がスマートフォン、タブレット端末などで撮影した。その後、会話感想シートに、「会話の全体的な印象」、「会話相手の印象」、「会話でよかった点・うまくいった点」、「難しかった点・違和感を覚えた点」などを各自記入した。そして、撮影した会話データをグループで分析した。グループ分析の項目は、会話感想シートに記入した感想、話題の流れとタイトル、話題開始部と終了部の特徴で、(1)、(2)の分析を参考にしながら、自分達が撮影した会話データをもとに、分析結果をワークシートに記入していった。さらに、会話データを見ながら、受講者同士が互いにフォローアップ・インタビューを行い、発話や、笑い、沈黙、話題転換の意図など、会話時の意識をお互いに聞いた。これらの結果をもとに、グループで分析の発表を行った。

受講者の「会話感想シート」の記述を表4に抜粋してまとめる。ここから分かるように、受講者は、自分達の参加する会話を客観的に見つけ、そこで何が起きているのかを言語化して捉えようとしていることが分かる。「会話の全体的な印象」としては、会話の雰囲気だけでなく、沈黙、フィラー、あいづち、スピーチレベル、非言語行動にも言及する受講者もいた。「会話相

手の印象」としては、お互いの印象をよくするための配慮のほか、人間関係の違いによる話しやすさの違いに言及していた。「会話でよかった点・うまくいった点」としては、共通点を見つけて話題を展開させている点、話題維持、協力的に話していた点、聞き手の役割を果たしている点などについて言及していた。また、中国人留学生が参加する会話を撮影したグループでは、接触場面の初対面会話ビデオを分析した際の視点を活かして、中国人留学生の日本語レベルに合わせた語彙・文法・話題で話していたという点も言及していた。「難しかった点・違和感を覚えた点」としては、会話開始部の発話の重複、遠慮、距離の取り方、話題維持、会話の終わらせ方などを挙げていた。

表 4 受講者自身の雑談の会話感想シート記述例

会話の全体的な印象	<ul style="list-style-type: none"> ・全員、全体的に固いという印象を持っていた。 ・明るくポジティブな雰囲気。 ・沈黙が少なかった。 ・ですます形と普通形が混用したことが多い。 ・アイコンタクトとジェスチャーを多用。
会話相手の印象	<ul style="list-style-type: none"> ・皆社会的でいい感じ。 ・皆が自分の話し出すタイミングをうかがいながら会話をしていた。 ・顔見知りと初対面が混ざっていたので、話しやすさに差があった。 ・初対面同士、互いにどう距離をとったら良いかまだ掴めず固い感じで話している。
会話でよかった点・うまくいった点	<ul style="list-style-type: none"> ・聞きやすいトピックで沈黙がない。 ・共通の話題から話を膨らませることが可能だった。 ・話題が終わりそうになったら続ける。笑顔や声のトーン。 ・皆協力的でバランス良くそれぞれ話していた。 ・あいづちや笑い、新たな質問をして沈黙をつくらないようにしていた。 ・使った単語と文法がやさしくて、中国の共有知識もあるので、理解し合いやすかった。
難しかった点・違和感を覚えた点	<ul style="list-style-type: none"> ・話し始めが被ってしまうと、かなり気まずい気持ちになっていた。 ・遠慮し合った。 ・どこまでフランクに接したらよいか。 ・頑張って話題を探している感がある。 ・会話の終わらせ方が分からない。

4.2. ロールプレイ（誘い、依頼）の分析活動

ロールプレイの分析活動は、(1)誘い、(2)依頼の2種の会話データの分析活動を行った。

(1)誘いのロールプレイの分析活動

まず、受講者でグループになり、普段どのような時に人を誘うかについて話し合った。そして、友人をディズニーランドに誘うロールプレイを行ってみて、その特徴や難しかった点などについて話し合い、ワークシートに記入した。その後、後輩の男子学部生が先輩の女子学部生をディズニーランドに誘うという誘い（断り）のロールプレイの会話ビデオを視聴し、気付い

たことをワークシートにメモした。そして、「誘いの会話の展開構造」(ウィモンサラウオン・中井 2017) とその定義・発話例を示したリストを確認した。この展開構造は、開始部(挨拶・雑談部)、主要部(先行部、誘い部(勧誘部、事情説明部・事情確認部、承諾部、断り・弁明部、相談部)、終結部(前終結部、関係再構築部))、終了部(別れの挨拶部)という区分から成る。これをもとに、グループで相談しながら、誘いの会話の文字化資料に、展開構造の区分を記入していった。さらに、他のグループと区分の仕方を比べ、区分した基準について話し合った。最後に、誘いの会話の文字化資料を見ながら、誘いの断りと会話参加者間の駆け引きの仕方や配慮の仕方、言語・非言語行動で興味を持った点についてワークシートに記入した。これらの分析を行った後、誘いの会話の分析活動の感想、今後の自身のコミュニケーションで気を付けたい点などについて記入した。

受講者のワークシート記述を分類した結果、「展開構造」、「配慮・意図」、「言語・非言語行動」、「日本語と中国語の違い」、「日本語教育への応用」、「自分のコミュニケーションで気付いた点」、「今後気を付けたい点」に分類できた(表5)。

ここから分かるように、受講者は、まず、授業で分析した誘いの会話には展開構造があることが意識化できたと言える。そして、自然なコミュニケーションでは、「展開構造」が整然と区分されているのではなく、会話相手とのやり取りの中で動的に変化していくという点も学んでいた。さらに、誘いと断りの際に用いられる「言語・非言語行動」に隠された話者の「配慮・意図」についても考える機会となっていた。特に、非言語行動は、会話の文字化資料だけでは記述し切れないため、ビデオを教材として用いて分析する重要性にも気付いていた。また、グループで話し合う際に、他者の意見を聞くことで、自分と捉え方が違う点に気づき、新たな視点を得たりしていた。特に、中国人留学生がいたグループでは、誘いの断り方について「日本語と中国語の違い」に注目していたようである。その他、日本語教師を目指している受講者は、今回の誘いの会話の特徴について「日本語教育への応用」をどのようにすべきかまで考察している者もいた。

「自分のコミュニケーションで気付いた点」としては、言語化されない意図を自身も会話に込めて話していることに気付いたという記述があった。さらに、会話データの分析についてグループで話し合う際、誘いの展開構造の認定が人によって異なることから、普段の会話でも人によって認識がずれることがありうるという気づきが得られた者もいた。「今後気を付けたい点」としては、分析した結果をもとに誘いの断り方に注意したいといった点が挙げられていた。さらに、自分や他者の非言語行動や配慮の仕方などについて留意していきたいと述べる者もいた。また、誘いの会話ビデオの中で断られてしまう男性の話し方に共感を示し、自身はこう振る舞いたいという意志を示す男性受講者もいた。

表5 誘い（断り）のロールプレイの分析からの学び

展開構造	<ul style="list-style-type: none"> ・「誘う」行為には、自分では気付いていなかったけれど多くの段階があることを知った。 ・自然なコミュニケーションでは、「誘いの会話の展開構造」の順番通りには会話は発展せず、誘い部の各段階が入り乱れたり、同じ部が再度登場したりすることもある。
配慮・意図	<ul style="list-style-type: none"> ・誘う側は「相手が誘いを苦痛と感じないための配慮」、誘われる側（断る側）は「相手のことを傷付けないための配慮」などを基本として、多くの「配慮」があると分かった。 ・「誘う」という1つの行為の中に相手の様々な思いが見てとれた。断るためにも相手の気持ちを考えたり、自分の立場を守るために言葉の裏に隠された「含意」を強く感じた。
言語・非言語行動	<ul style="list-style-type: none"> ・今回の分析では、言語はもちろん、非言語行動まで、決められた項目に沿って分類しようとすると、裏にある意図などがどんどん気になっていったので、フォローアップ・インタビューなどの重要性に気付けた。 ・個人的に今回のロールプレイでは、話の内容よりも、当人たちの身ぶり手ぶりや視線が気になった。そこには相手への気遣いや、断りの空気を軽くするなど、当人も無意識にしている重要な役割があるのだと思う。 ・成文化すると、表情やジェスチャー、速さが分らないので、シナリオや文字起こしの材料だけで会話分析をすることは難しいと感じました。
日本語と中国語の違い	<ul style="list-style-type: none"> ・中国ならNoと一言。 ・中国では忙しいことを断りの理由とすることが多い。
日本語教育への応用	<ul style="list-style-type: none"> ・誘いの断り方や、断ってからの人間関係を再確認するという行為は、日本語以外の会話にもあるのか興味を持った。もし、これが日本語に特有の断り方であれば、日本語学習者もこの断り方を学習しておく必要があるかもしれない。また、学習者が日本語で誘った場合も、日本語の断り方では、YesかNoかはっきりとした返事がもらえなくて困惑するかもしれないので、誘う側・承諾する時/断る時という場合分けをして、それぞれのパターンを複数の言い方で学習者に示す必要があるだろう。
自分のコミュニケーションで気づいた点	<ul style="list-style-type: none"> ・意識していないだけで、自分も直接言葉には出さないけれど相手に気付いてほしい内容を含ませて会話をしているのではないかと思いました。 ・グループメンバーの中でどこからが誘いの導入部で断り部かということ議論した際、意見が異なり、このことから、普段の会話においても自分が思っていることと相手がそれをどう受け取るかには差が生じることもあるのだと思った。
今後気を付けたい点	<ul style="list-style-type: none"> ・授業を通して、誘うのは勇気があることと改めて確認したので、今後何かを断るときは単に断る、謝るだけでなく「誘ってくれてありがとう」と言えるといいのかなと思った。 ・「言語に関わらず断るときは上を向いたり、下を向いて視線をそらす」という指摘があったので、自分の実際の会話で観察してみたい。また、思っていることをはっきりと言わなかったり、思っていることと違うことを言ったりする相手への配慮が見られたので、実際の会話でも自分や相手が実践しているか気を付けて見てみようと思った。 ・相手の非言語の行動にも注意しつつ、相手に配慮することを心がけたい。 ・もし自分が先輩を誘う側になったら、あの動画の後輩くんのように、何とも煮えきらないことを言ったり、押しが強いんだか弱いんだか分からないことを言ったりしてしまうと思う。円滑な「誘い」のコミュニケーションができるよう、「勢い」を大事にしたい。

(2) 依頼のロールプレイの分析活動

まず、受講者がグループになり、普段どのような時に人に依頼し、どうすれば依頼が成功するか、および、上下・親疎関係、依頼内容の違いで依頼の仕方が変わるかについて話し合った。そして、同期の友人に授業のノートを借りる、同期の友人に引っ越しの手伝いを頼む、後輩に引っ越しの手伝いを頼むという依頼のロールプレイを行ってみて、その特徴や難しかった点、依頼内容、人間関係による依頼の仕方の違いなどについて話し合い、ワークシートに記入した。その後、演劇の衣装を縫う手伝いを頼む（同期、後輩、先輩）、引っ越しの手伝いを頼む（同期、後輩、先輩）という6種の依頼（承諾）のロールプレイの会話ビデオを視聴し、気付いたことをワークシートにメモした。そして、依頼の文字化資料を見ながら、依頼の表現、会話の展開のさせ方、言いさし発話、繰り返し、相手への配慮の仕方、相手のメリットへの言及、申し訳なさの表明、非言語行動、会話全体の長さ、負担の軽減、親しさの表現といった点についてグループで分析を行った。分析の際は、上下・親疎関係の違い、依頼内容の違いに着目して、依頼の会話を比較分析するようにした。この分析結果をクラス全体で報告し合い、議論した。これらを行った後、依頼の会話の分析活動の感想、今後の自身のコミュニケーションで気を付けたい点などについて記入した。

受講者のワークシート記述を分類した結果、「人間関係・依頼内容による違い」、「言語行動」「非言語行動」、「日本語と母語の違い」、「自分のコミュニケーションで気付いた点」、「今後気を付けたい点」に分類できた（表6）。

ここから分かるように、受講者は、まず、先輩と後輩、同期同士といった「人間関係」や、「依頼内容」によって依頼の仕方が変わるといった点に興味を持っていたようである。さらに、言いさし発話や依頼内容に対する相手の負担の軽減、母音の引き延ばしを伴った依頼表現といった「言語行動」を分析する者、体の向き、姿勢、目線、ごまかし笑いといった「非言語行動」を分析する者もいた。その他、インドネシア人受講者2名は、「日本語と母語の違い」として、分析した日本語母語話者の依頼の会話の仕方と自身を知るインドネシア人の依頼の会話の仕方に異なりがある点に興味を示していた。ただし、本人らも述べるように、個人差があるため、分析した会話データの量が限られている点を強調し、1つの会話データで見られた特徴をステレオタイプ化しないように注意喚起しておく必要があると言えよう。

「自分のコミュニケーションで気付いた点」としては、相手との関係性によって依頼の仕方を調整していることに気付いた者、自分達が普段、配慮した言語行動や非言語行動を用いて様々な工夫をしながら会話していることに気付いた者、自分が回りくどい言い方をしていることに気付いた者などがいた。「今後気を付けたい点」としては、相手の反応を見ながら会話していきたい、相手の利益になることを提示したり相手の負担を減らしたりする発話を用いつつ慎重に

依頼したいと述べる者がいた。さらに、後輩に対して高圧的にならないように依頼するようにしたいと述べる者もいた。

表 6 依頼（承諾）のロールプレイの分析からの学び

人間関係・依頼内容による違い	<ul style="list-style-type: none"> ・同じ依頼でも内容や人間関係によってこんなにも差が生まれるのかと驚いた。1つ1つの言葉や動きにも思いや意図が見え隠れしていてそれを客観的に読み取って分析するのは非常におもしろいと感じた。 ・同期が最も回りくどい感じになる。お互いに頼むのもそれを断るのも気まずい。最も関係を崩したくない間柄ゆえ、気を使う度合いが大きくなる。 ・後輩に頼む方が話が完結で頼む方も気持ち楽そう。 ・後輩から先輩への依頼も先輩の時間を無駄にしないためか、直ぐに頼み事の内容を述べていた。
言語行動	<ul style="list-style-type: none"> ・同期の会話がすごく長い印象を受けました。語尾をにごす発話が多いのは、やはり日本語や日本人の曖昧さが出ているのではないかと思った。 ・直接お願い事を言いづらい時、無意識に言いさし発話になる傾向があるように思った。 ・事情説明の際、相手への負担の少なさをアピールしている。 ・お願いをする時は「おねがーい」というように、伸ばす音が多い気がした。
非言語行動	<ul style="list-style-type: none"> ・非言語行動（体の向き、姿勢、目線など）を適切に活用しないと、特にこういった場面では無礼だと思われてしまうと感じた。 ・同期に頼む時はごまかしの笑いが多く、後輩には直球。
日本語と母語の違い	<ul style="list-style-type: none"> ・日本人は仲いい人だと大きいお願いの方が頼みづらいのが初めて分かりました。インドネシアは逆に仲いい人の方が気を使わずに頼めます。もちろん個人差もあると思いますが、この違いが面白かったです。 ・同期の会話では、頼んだ人が頼まれた人に対していちいち大げさに「本当？」とか「ありがとう！」を言ったりして、表情もすごく豊かだった。彼女はなんでこんなに大げさにリアクションしたんだろうと疑問に思う。たぶんその友達とこれからいい関係をきずきたいからかなと推測してみたが、私にはまだ違和感を感じる。母国のインドネシアの人々の間では、人にもよるのだが、関係の近い友達同士ではそういうことがあまりなく、逆にそういうことをしてしまうと、「気を付けすぎ」とか言われたりして、相手に失礼だという場合が普通ではないかと思う。文化的面のちがいをすごく感じた。
自分のコミュニケーションで気付いた点	<ul style="list-style-type: none"> ・同じ依頼内容でも、人間関係によって依頼の表現ややり取りが全く違うことに改めて気付かされた。話し手と聞き手の年齢差や関係性を無意識で確認しながら私たちはコミュニケーションをとっているのだと思う。 ・依頼の分析から、私たちは常に相手のフェイスに配慮した言葉を選んだり、ジェスチャーをまじえたりと、様々な工夫をしながら会話をしていると分かった。 ・実際に自分のお願いのし方を思い出してみると、非常に回りくどく言っていることに気付きました。確かに自分の立場や相手の思いを考慮すると、なかなか直接言えないこともあるとは思いますが、はっきりと言うことも重要であると感じました。
今後気を付けたい点	<ul style="list-style-type: none"> ・もう少し相手の反応を見ながらコミュニケーションをとっていきたい。 ・自分のことだけを考えずに、相手の利益になるようなことを依頼では付け加えると円満な人間関係が築けると思うので気を付けたい。 ・メリットの提示や負担を減らす発言は依頼の際に大切なストラテジーだと思った。 ・後輩に依頼する時は、高圧的にならないようにしたい。

4.3. 留学の体験談の分析活動

まず、受講者でグループになり、留学の体験談を話すとしたら、どのようなことを話すか、または聞きたいかについて話し合った。そして、留学の体験談の会話、留学の体験談のスピーチ、留学の意義についての話し合いの3種の会話の違い、および、それぞれに必要とされる能力・技能・配慮すべき点について話し合い、ワークシートに記入した。その後、同一人物が参加する3種の会話ビデオを視聴し、気付いたことをワークシートにメモした。この3種の会話とは、留学の体験談の4者会話、留学の体験談のスピーチ（一人でカメラに向かって話す）、留学の意義についての話し合い（意見の対立が見られる断片）の4者会話である。

そして、各会話の文字化資料、会話参加者が記入した会話感想シートの記述の抜粋を参考に、各会話の特徴や必要とされる能力・技能・配慮について、ワークシートに記入していった。この分析結果をクラス全体で報告し合い、議論した。これらの分析を行った後、留学の体験談の3種の会話の分析活動の感想、今後の自身のコミュニケーションで気を付けたい点などについて記入した。

受講者のワークシート記述を分類した結果、「3種の会話の相違点・共通点」、「自分のコミュニケーションで気付いた点」、「今後気を付けたい点」に分類できた（表7）。

ここから分かるように、受講者は、まず、「3種の会話の相違点・共通点」について言及している。会話の種類によって技能・配慮の仕方のほか、会話の雰囲気や非言語行動などが異なる点を挙げていたが、「相手を重んじる配慮」はどれも共通しているという点を挙げている者もいた。「自分のコミュニケーションで気付いた点」としては、特に、話し合いの場面での自分の意見の言い方や人間関係の維持の仕方に言及する者のほか、日本人の議論の仕方、反応の仕方に改めて気付いたと述べる者もいた。「今後気を付けたい点」としては、その場に合わせた話し方ができるようになりたいと述べる者のほか、今後の就職活動や話し合いの場面などでの意見の述べ方に気を付けたいと述べる者もいた。特に、「留学の意義の話し合い」で参加者間の衝突があった場面が一番印象に残り、そこから自分が普段どのように意見を述べているか内省していたようである。こうした印象に残りやすい現実味のある会話データを分析することで、受講者がそこで起きていることを自分の問題として考える契機となると言える。

表 7 留学の体験談の分析からの学び

<p>3種の会話の相違点・共通点</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・複数人で話す時と一人でカメラに向かって話すスピーチの時では用いる言葉や話の論理性、フィラーやあいづちの多さが大きく異なるということが分かった。また、お互いの体験談を話す時とみんなで1つのことを決める話し合いの時の場の雰囲気や表情、非言語行動の多さも異なっていた。 ・発話の目的や形態によって必要とされる技能や配慮が異なる。特に話し合いでは、1つの目標に全員が向かう過程で、対立が他のコミュニケーションと比べて起こりやすい。 ・会話、スピーチ、話し合いでは全く違うようで、実は根本の「相手を重んじる配慮」はどれも不可欠。また、自分の意見を相手に伝えるという点でも、3つとも同じく、はっきり自分の意見を伝えるべき。
<p>自分のコミュニケーションで気付いた点</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・私はわりと自分の意見を周りに理解してもらえぬまでしっかり話すタイプなので、もしかしたら結構ビリビリした空気を作ってしまったかもしれないと反省した。 ・お互いの持つ意見に違いがある時、どのように人間関係を維持しながら、意見をまとめていくかという難しさを改めて実感した。私自身もサークルの運営の会議の場で、度々こうした光景を経験したが、今回のように客観的に（第三者の立場から）会話を分析してみると、人間関係を維持するための気遣いを自然としているのだなと思った。 ・話し合いの場では意見の対立が生まれることもあるが、相手のメンツを保ちつつ意見を発信していくことが大切であると思った。 ・日本人は、ディスカッションなどになると、ある意味着火点のような人がいないと、進まない。それがあれば、各々、どっと会話に参加する傾向があるように思う。 ・思わぬ反対意見の登場に、何とか不和を生み出さぬよう考えをめぐらせている男性2人の様子が印象的だった。違う局面からとらえて「皆同じ」とまとめようとする女性の考え方も、「個性よりも全体の統一性を好む」日本人らしさだと思った。
<p>今後気を付けたい点</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・その場に合わせて適切な話し方を選んで用いていきたいと思う。 ・今後、就職活動で初対面の方々と会話をするが増えていくと思うので、自分の会話の特性を捉えて、良い所は生かして、悪い所は改善していくべきだと感じた。 ・今後、就活が本格化するが、意見をぶつからせる話し合いで学んだことを活かしたい。 ・自分の意見を言う時も、相手に不快な思いをさせないように気を付けたい。

4.4. グループ分析発表の活動

グループ分析発表の活動は、(1)分析グループを作る（3、4人）、(2)会話データ収集計画書の作成（会話の場所、場面、種類、参加者、分析項目など）、(3)会話データ収集方法の確認、(4)発表アウトライン作成、(5)グループ分析作業、(6)グループ分析発表・質疑応答という手順で行った。なお、各手順の段階で、適宜、教師からのフィードバックを行った。なお、(6)グループ分析発表は、文字化資料・分析の要点をまとめた発表資料の配付、および、会話ビデオの提示を行った。

グループ 1~9 の発表テーマ（分析テーマ、会話データ、分析項目）は、表 8 の通りである。受講者達は、本授業で扱った、依頼、インタビュー会話といった会話データなどを取り上げ、展開構造、親疎関係、上下関係の違い、配慮、駆け引き、話題導入の仕方、あいづち、言いさし発話、非言語行動などの特徴について分析していた。さらに、これらをもとに、本授業では扱わなかった LINE などの SNS を媒体とした会話や、トーク番組における芸能人の話し方、ドキュメンタリー番組における夫婦喧嘩の会話などの分析に発展させて発表していた。ここから、本授業で学んだことを踏まえつつ、受講者の関心に応じた独自の会話データと会話の特徴を選んで分析しようとしていたことが分かる。

表 8 グループ分析発表の活動の発表テーマ

	分析テーマ	会話データ	分析項目
グループ 1	依頼の展開構造の分析	対面会話と LINE 会話	開始部、主要部、終結部の特徴（呼びかけ、挨拶、事情説明、承諾・断り、感謝、謝罪、補償、絵文字、スタンプ、句読点、スピーチレベルシフト）
グループ 2	親疎関係の異なる先輩との会話の分析	クリスマスの予定をテーマにした会話	話題導入の仕方、あいづち、非言語行動（視線、手の動き、体の向き）
グループ 3	言いさし表現と丁寧語の分析	年齢差のある 4 者会話	言いさし発話、丁寧語、普通体
グループ 4	予定決定過程の分析	グループ LINE (3 人 vs. 5 人)	展開構造、進行役の役割、グループ人数による予定決定までの時間の長さ、絵文字、スタンプ、言語表現、記号
グループ 5	インタビューの分析	インタビュー番組	話し手と聞き手の役割 スピーチスタイル
グループ 6	マツコ・デラックスのツッコミの分析	トーク番組	ツッコミの位置、女/男口調でのツッコミ発話、ツッコミをする際に生じる間
グループ 7	話しにくい話題の扱い方の違いの分析	日本とインドネシアのトーク番組	キーワードの使い方、ジェスチャー・表情、フィラー、雰囲気
グループ 8	司会者の役割	トーク番組	配慮（話を続けさせる、会話のパスを繋ぐ）、駆け引き、非言語行動（ジェスチャー、指差し）
グループ 9	夫婦喧嘩の分析	ドキュメンタリー番組	非言語行動、敬語表現、主導権

5. 授業アンケートの分析

本授業を受講した感想について聞くアンケートを授業の最終日に実施した。アンケート項目は、「(1)会話データ分析の活動で学んだ点」、「(2)その他の感想」、「(3)この講義の改善点・足りなかった点・もっとこんなことがしたかったという点」であった。この3項目別に、受講者のアンケートの記述を内容ごとに分類し、表9、10、11にまとめた。

まず、「(1)会話データ分析の活動で学んだ点」(表9)としては、受講者は、基本的な「会話データ分析の手法」を学び、会話の場面や種類による違いといった「バリエーション」を意識化し、それぞれの「会話の特徴」を考える機会としていたことが分かる。特に、会話で用いられる「非言語行動」に改めて注目するようになったというコメントが見られた。また、ロールプレイなどで演じられた会話よりも、自身が参加する会話や自然な会話などの方が「興味が持てる会話データ」であったという声もあった。さらに、「グループ活動による多角的な視点の獲得」を挙げ、「他者の視点を得て次の課題の参考にした」、「グループの留学生の視点が得られた」といった点を評価していた。また、知識注入型の講義形式ではなく、受講者が自分で実際に会話データを分析し、認定基準を考え、会話の特徴を話し合うといった「活動型授業」であったため、「実践的な知識がついた」、「楽しみながら学習できた」という声もあった。そして、日本語教師を目指す受講者の中には、会話データ分析の「日本語教育への活かし方」を考える者もいた。

「(2)その他の感想」(表10)としては、国や文化による会話の特徴の違いを「今後分析してみたい点」として挙げている者がいた。また、学んだことを活かして自身の会話の中で「今後気を付けたい点」を述べる者、「会話データ分析と自身の専門との関係」を見出し、得た知見を自身の専門にも活かせるのではないかと述べる者もいた。

「(3)この講義の改善点・足りなかった点・もっとこんなことがしたかったという点」(表11)としては、「グループの話し合い時間」をもっと多く取って欲しかったという点、「より多様な会話データの分析」をしたかったという点、「文字化の方法」をきちんと教えてほしいという点、「理論の導入」をもっとしてほしいという点、「発表の機会」をもっと増やしてほしいという点、「日本語教育との関係」がもっと知りたかったという点が挙がっていた。今後の改善を行う必要がある。

表9 授業アンケートの抜粋「(1)会話データ分析の活動で学んだ点」

会話データ 分析の手法	<ul style="list-style-type: none"> ・会話の展開方法、会話分析の視点を学んだ。 ・会話データというデータを分析、結論付け、意見を言うこと。 ・単純な雑談でも、人間関係や気の遣い合いなどが表れた点が無数に分析できる。 ・会話の様子を様々な点に着目し、文字化資料を見ながらじっくりと分析したことがなかったので新鮮だった。
バリエーシ ョン	<ul style="list-style-type: none"> ・改めて意識してみると、会話には様々な種類があり、それぞれに異なった要素が見えたところは非常におもしろかった。 ・誘いや依頼など場面毎に会話分析をしたのは比較がしやすく、よい学習になった。
会話の特徴	<ul style="list-style-type: none"> ・どれも状況設定や話者の関係が比較できる形でいくつかの実際の会話の動画を見られたので、文脈により談話の構造や配慮の仕方や量が異なることがよく分かりました。 ・会話の内容や相手が変わると言葉遣いや非言語行動が大きく変わってくるということを実際の映像を通して学ぶことができた。 ・日本語学習者の会話をみていると、分からない時にごまかしたり、話題を変えようとしたりと、自分がスペイン語を話す時にやることと同じことをしていることに気付いた。
非言語行動	<ul style="list-style-type: none"> ・間や発話の重なり、非言語行動など言葉以外の様々な要素があることが分かった。 ・間、ジェスチャー、フィラーなどは実際「意味」をもっていることが分かった。 ・発話だけではなく、ジェスチャーやあいづち、表情など全て含めて分析しなければならないということが分かった。
興味が持て る会話デー タ	<ul style="list-style-type: none"> ・自分たちの班の会話を撮って分析したのは非常に興味深かった。分析の対象が自分となると、必然的により興味もわくし、どういう意図・心情で発言したのかについても話しやすく、分かりやすかったので良かった。 ・いくつかリアルなものも見せて頂いたが、演じるという形より、より実際の場に近い状況の自然な会話（フリートーク、対談）の方が素が出ている気がして分析が楽しかった。
グループ活 動による多 角的な視点 の獲得	<ul style="list-style-type: none"> ・グループで分析することで、自分では気付かなかった点を知ることができ、またそこから自分の新たな考えを発見することができ共有できたことがおもしろかった。 ・グループでの話し合いで得た新しい視点を次の活動にも活かすことで、授業内での話し合いが非常に充実したものになった。 ・毎回違うグループを組んで取り組んだので、留学生の視点なども得ることができた。 ・コミュニケーション能力が重要とされる現代で、他学生の意見を知れたのでも良かった。他人がコミュニケーションに関して考えていることを聞くという機会はこのような授業でないと中々ないので、非常に良い経験になりました。
活動型授業 による実践 的な知識	<ul style="list-style-type: none"> ・会話分析の方法の知識を学ぶだけではなく、実際に自分でやってみたり、ビデオや文字化から特徴を分析する時間もあり、実践的な知識が身についた。 ・会話データ分析に関する予備知識が一切ない状態で授業に参加したが、全ての活動を通して能動的に考える機会が多く、楽しみながら学習することが出来た。
日本語教育へ の活かし方	<ul style="list-style-type: none"> ・無意識で日本人がこなしてしまう「日本語」らしい依頼や誘いの会話を話題区分し、密に分析することで、日本語教育に携わる立場になった際に、論理的に教えることができると思った。

表 10 授業アンケートの抜粋「(2) その他の感想」

今後分析してみたい点	<ul style="list-style-type: none"> ・国や文化による展開の仕方の違いというものを見てみたいと思った。 ・国を越えた会話分析比較は今後自分でも注目して見てみたい。
今後気を付けたい点	<ul style="list-style-type: none"> ・会話する時に、相手の行動や言動から「自分がなぜこの人にこんな印象をもつのか」など新たな視点をもって考えてみたい。 ・コミュニケーション能力を上げたいと思っていたので、会話分析を意識しながら、よりスムーズでポジティブな会話展開ができるようになりたいと思う。 ・これから社会人となると今までよりも親疎関係や上下関係に注意を払い、会話をしなければならぬ場面が増えると思う。今回談話を客観的に見たことで、特にポライトネスに関わる部分ではターンテイキングやあいづちなど、自分の努力で向上させることができる点が多くあると分かった。敬語や表現など分かりやすい配慮だけでなく、談話の中の様々な要素が、丁寧さに影響していることを意識して、今後の生活に役立てていきたい。 ・相手の発言から意図をより汲み取るヒントを得た。人と関わる職業や進路を考えている為、尚更会話の中で自分や相手が言葉以上に発しているメッセージを意識したい。 ・これから就職活動だが、面接など様々なところで自分が分析される側となる。その際には、自分が分析している際に気を付けていたことを、応用した振る舞いをしていきたい。
会話データ分析と自身の専門との関係	<ul style="list-style-type: none"> ・私はダイアログの通訳について研究するゼミに所属している。この通訳には会話のターンテイキングや内容が非常に重要なので、この授業で学んだ分析方法を参考にしたい。 ・ゼミにおいて、第二言語習得研究を学んでおり、使用している教科書に会話データ分析の授業を受けていたおかげで理解できた内容があった。今後も、今期の授業で学んだことを活かして、自分の専門の理解を深めていきたい。 ・教育に関わる仕事をしていきたいので、教師の会話の参加のあり方や、ディスカッションの行い方が学べてよかった。また活かしていきたいと思った。 ・会話分析の手法を異なる学問分野の学習に役立てられたらと思います。

表 11 授業アンケートの抜粋

「(3) この講義の改善点・足りなかった点・もっとこんなことがしたかったという点」

グループの話し合い時間	<ul style="list-style-type: none"> ・1つ1つのワークの時、話し合う時間がもう少し欲しかった。 ・毎回ワークシートに書くことが多く時間が足りなかったです。会話を分析する授業では特にもっと話し合う時間を多くとれたら良かったと思います。
より多様な会話データの分析	<ul style="list-style-type: none"> ・もっと多くの会話を分析して一般的な傾向を知ることができれば良かった。 ・もっと多様な種類/場面の会話分析がしたかった（上司・部下など）。 ・ドラマや映画を題材にして分析するという取り組みで良かった。
文字化の方法	<ul style="list-style-type: none"> ・データの書き起こし方が難しく、なかなか身につかなかった。 ・グループ発表の準備をしている際に文字化をする必要があったが、具体的に文字化方法を指導していただくタイミングは無かったため、戸惑った。
理論の導入	<ul style="list-style-type: none"> ・主に会話のビデオを見て話し合うとき、気付いたことを話して終わってしまっているのだろうか、ということをつまに思った。どういう理論があって、どんな研究報告があるのかなどについてももう少しさらに踏みこんで学習できたらより良かったと思う。
発表の機会	<ul style="list-style-type: none"> ・最終発表の形式が上手くつかめなかったため、もう少し発表の場が多くあるとよかった。
日本語教育との関係	<ul style="list-style-type: none"> ・会話分析の研究が日本語教育の現場にどのように活かされているか気になりました。

6. 総合的考察

以上の受講者の学びの分析結果をもとに、本授業と教材の効果(6.1)、および、本授業と教材の改善点(6.2)について、考察を行う。

6.1 本授業と教材の効果

受講者によるワークシート、授業アンケートなどの記述から、本授業と教材について、第2章の表1で述べた「会話データ分析の手法を学ぶ教材開発の理念・目的」の(1)実際の会話データの分析体験・グループ分析、(2)大学生活で身近な会話データの分析、(3)自身の会話の内省・改善点の検討が達成できたのではないかと考えられる。

(1)に関しては、受講者が実際の会話データを分析することで、日本語の会話の特徴や、その基本的な分析手法が学んでいたようである。そして、ワークシートの課題をもとに、受講者同士がグループで話し合いながら分析を行い、他者の多角的な視点に触れることで、新たな課題を発見していた様子がうかがえた。特に、外国人留学生在がグループの話し合いに参加している場合は、日本語以外の言語からの視点にも触れることができ、新たな視点を得やすかったようである。

(2)に関しては、受講者が大学生活で遭遇しやすい会話場面を扱ったため、身近に感じながら分析に取り組めたようであった。特に、話し合いの衝突場面などの会話データは、印象に残りやすく、受講者自身が普段参加している話し合いを想起させ、自分の問題として考える契機となっていた。また、最後に行ったグループ分析活動の発表では、受講者達が自身の関心に合わせて独自の会話データを収集・分析してきたため、より受講者の関心に基づいた分析活動が行えたと言える。

(3)に関しては、会話データの特徴で分析した視点をもとに、自身の会話の仕方を内省し、今後の自身の日常生活に活かして改善しようとする姿勢が見られた。特に、就職活動や社会生活を控えている学部3、4年生の場合は、今回の会話データ分析の知見を就職関連の場面で活用できると考えていたようである。また、会話データ分析の手法を自身の専門分野など他分野とも結び付けて活用しようとする姿勢も見られた。さらに、外国人留學生は、日本語と母語の会話の特徴の違いを意識化する契機となっていたようである。

6.2 本授業と教材の改善点

本授業と教材の改善点もいくつか明らかになった。第5章で見た授業アンケートの記述からは、「授業運営面」と「教材内容面」の改善点が挙げられた。

「授業運営面」の改善点としては、グループの話し合い時間の長さ、発表の頻度などの調整が挙げられる。1学期間、および、授業1回分の時間配分の検討が必要である。

「教材内容面」の改善点としては、より多様な会話データを扱った分析ができるようにすることが挙げられる。今回は、限られた会話データの分析を行ったため、ややもすると、分析した会話データの特徴を過剰に一般化してステレオタイプに捉えてしまう危険性も考えられた。例えば、本授業では、同期、後輩、先輩に依頼するという3本の会話データを2種、合計6本しか分析しなかった。そして、そこで見られる特徴として、後輩や先輩より同期に依頼する際に気を遣い合って回りくどい話し方になる様子が見られる点に驚きや共感を覚えている受講者がいた。受講者達の中には個人差を認めつつ、視聴した会話データの特徴を捉えていた者もいたが、限られたデータである点を強調し、分析結果からステレオタイプに陥らないようにさせる工夫が必要であると言える。例えば、様々なデータを見せて比較させ、相手や場面、個人によって会話の特徴が動的に変わるということを意識化させることが重要であろう。その他の改善点としては、文字化の方法と理論の導入など、会話データ分析のより基礎的な知識を教材に盛り込む必要性も見られた。さらに、日本語教育に関心のある受講者のために、会話データ分析と日本語教育との関係をより明確に考えられるような課題も設ける必要性が見られた。

おわりに

以上、会話データ分析の手法を学ぶための教材を用いた授業実践における受講者の学びについて分析し、授業および教材の効果と改善点を検討した。その結果、実際の身近な会話データの分析をグループの話し合いを通して行う活動は、多角的な観点から受講者が会話の特徴や基本的な分析手法を学ぶことを可能にし、さらにそれをもとに受講者が自身の会話を内省する機会を与えられるという点で有効であることが明らかになった。一方で、グループの話し合いの時間配分などの授業運営面、および、より多様な会話データとより基礎的な知識の提供、日本語教育との関連付けの必要性といった教材内容面の改善も必要であることが分かった。

今後は、本研究で明らかになった授業および教材の効果と改善点を考慮に入れて、会話データ分析の手法を学びながら自身の会話を改善していくためのよりよい授業および教材開発、教材の共有を行っていきたいと考える。さらに、今回の研究では、授業中の受講者同士のグループの話し合いの様子などは分析できなかった。今後は、受講者が会話データ分析の活動の中でどのような話し合いのプロセスを経て、各自の学びを得ているのかも詳細に分析する必要があると言える。また、今回の授業で扱えなかった別の会話データを用いた分析活動において、受講者の中にさらに異なった学びが起きるのかも検証してみたい。これらの研究をもとに、今後も会話データ分析の手法をより多くの人々に広め、自身の会話を見つめ直す機会を提供することに貢献していきたいと考える。

注

- 1) フォローアップ・インタビューの質問事項の例としては、「なぜ質問や発話をしたか」、「なぜ話題を開始・終了したか」、「なぜ笑い、あいづち、コメントをしたか」、「なぜ沈黙したか、言いくさそうにしていたか」などを示した。
- 2) 本文献講読の活動における受講者の学びについては、中井(2018b、2019)で分析した。
- 3) インタビュー会話の分析活動については、中井(2018a)で詳しく報告しているため、本研究では割愛する。
- 4) 受講者の話題区分の特徴、および、ワークシートへの記述に関しては、大場・中井(2018)で集計を行い、傾向をまとめたので、参照されたい。

付記

本研究は、平成28～30年度JSPS科研費(基盤研究(C))「会話データ分析の手法を用いたインターアクション能力育成のための教材開発」(研究代表者:中井陽子)(課題番号:16K02800)の研究成果の一部である。本研究にご協力くださった皆様、貴重なコメントを下くださった皆様に感謝致します。

参考文献

- 岩田夏穂・初鹿野阿れ(2012)『にほんご会話上手!』アスク出版
- 大場美和子(2013)「会話データ分析研究を活用した日本語教員養成課程の授業実践の分析—接触場面におけるコミュニケーション行動の問題を対象に—」『広島女学院大学国語国文学誌』43:1-14.
<http://harp.lib.hiroshima-u.ac.jp/hju/metadata/12266> (2018.11.1 閲覧)
- 大場美和子・中井陽子(2018)「会話データ分析の初学者による話題区分の特徴の分析—分析手法の指導に向けて—」『社会言語科学会第41回大会発表論文集』154-157.
- ウィモンサラウオン、アパポーン・中井陽子(2017)「誘いの会話における言いさし発話の分析—日本語母語話者によるロールプレイをもとに—」『日本語教育研究』40:141-160.
http://www.kaje.or.kr/html/sub04_01.asp (2018.11.1 閲覧)
http://210.101.116.36/JournalSearch/ISS_Detail.asp?key=3543775&tname=kiss2002 (2018.11.1 閲覧)
- 中井陽子(2002)「初対面母語話者／非母語話者による日本語会話の話題開始部で用いられる疑問表現と会話の理解・印象の関係—フォローアップ・インタビューをもとに—」『群馬大学留学生センター論集』2:23-38.
- 中井陽子(2003a)「話題開始部で用いられる質問表現—日本語母語話者同士および母語話者／非母語話者による会話をもとに—」『早稲田大学日本語教育研究』2:37-54.
<http://hdl.handle.net/2065/3496> (2018.11.1 閲覧)
- 中井陽子(2003b)「初対面日本語会話の話題開始部／終了部において用いられる言語的要素」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』16:71-95.
<http://hdl.handle.net/2065/3469> (2018.11.1 閲覧)
- 中井陽子(2004)「話題開始部／終了部で用いられる言語的要素—母語話者及び非母語話者の情報提供者の場合」『講座日本語教育』40:3-26.
<http://hdl.handle.net/2065/3469> (2018.11.1 閲覧)
- 中井陽子(2008)「日本語の会話分析活動クラスの実践の可能性」『ことばの教育を実践する・探究する』凡人社 pp.98-122.
- 中井陽子(2009)「会話を分析する視点の育成—コミュニケーション能力育成のための会話教育が行える日本語教員の養成—」『大養協論集2008』55-60.
- 中井陽子(2010)「第3章作って使った後で」尾崎明人・椿由紀子・中井陽子(著)『日本語教育叢書「つくる」会話教材を作る』関正昭・土岐哲・平高史也(編)191-216.スリーエーネットワーク
- 中井陽子(2012)『インターアクション能力を育てる日本語の会話教育』ひつじ書房
- 中井陽子(2017a)「誘いの会話の構造展開における駆け引きの分析—日本語母語話者同士の断りのロールプレイとフォローアップ・インタビューをもとに—」『東京外国語大学論集』95:105-125.

- <http://repository.tufs.ac.jp/handle/10108/89930> (2018.11.1 閲覧)
- 中井陽子 (2017b) 「会話の種類による参加者の配慮の違い－体験談の会話・スピーチ・話し合いの分析をもとに－」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』 9:46-54.
<http://academicjapanese.jp/dl/ajj/ajj9.46-54+.pdf> (2018.11.1 閲覧)
- 中井陽子 (2018a) 「インタビュー会話の分析活動から学ぶより良いインタビューの方法－会話データ分析の手法を学ぶ学部授業での実践をもとに－」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』 10:36-44.
<http://academicjapanese.jp/dl/ajj/ajj10.36-44.pdf> (2018.11.1 閲覧)
- 中井陽子 (2018b) 「韓国の教育者・研究者の語りからの学び－日本の学部・大学院生のレポートの分析から－」『韓国日語教育学会 2018 年度 第 33 回 国際学術大会』 86-90.
- 中井陽子 (2019) 「4.学部生の学びの分析」中井陽子・寅丸真澄・大場美和子「第 42 回研究大会ワークショップ 会話データ分析の教育者・研究者による語りから広げる研究と実践の視野－グループ・ディスカッションを通して－」『社会言語科学』 21.2 (印刷中)
- 中井陽子・赤木美香・王婷婷 (2015) 「会話データ分析による「研究と実践の連携」の意識化の試み－大学院日本語教員養成課程の演習を例に－」『大学日本語教員養成課程研究協議会論集』 11:1-14.
<https://daiyokyo.files.wordpress.com/2015/03/nakai.pdf> (2018.11.1 閲覧)
- 中井陽子 (編著) 大場美和子・寅丸真澄・増田将伸・宮崎七湖・尹智鉉 (著) (2017) 『文献・インタビュー調査から学ぶ会話データ分析の広がり軌跡－研究から実践まで－』ナカニシヤ出版
- Nakai, Yoko Kato. (2002) Topic shifting devices used by supporting participants in native/native and native/non-native Japanese conversations. *Japanese Language and Literature*. 36:1:1-25. Association of Teachers of Japanese.
<http://www.jstor.org/stable/pdf/3250876.pdf> (2018.11.1 閲覧)